

「トマスの福音書」は、1945年に、エジプトのナイル川河畔の洞窟に1850年以上も埋もれていた壺の中から奇跡的に発見されました。これは、イエスの言葉だけを記載してあるもので、「言葉福音書」と呼ばれています。全部で114項目ありますが、そのほとんどが例え話です。一読して何を言いたいのか、良くわからないものが多いのですが、「それらは、瞑想や悟りのお話で、イエスが話した例え話である」と仮定して、では、一体それが何の例え話であるのかを解説しています。今回は、その第9回目です。

なお、各センテンスの訳文は、上段、中段、下段の順に

(1) Thomas O. Lambdin による英訳

(2) Stephen Patterson and Marvin Meyer による英訳

(3) 「トマスによる福音書」(荒井献著・講談社学術文庫)による和訳

の順に記載しています。

---

(51) His disciples said to him, "When will the repose of the dead come about, and when will the new world come?"

He said to them, "What you look forward to has already come, but you do not recognize it."

(51) His disciples said to him, "When will the rest for the dead take place, and when will the new world come?"

He said to them, "What you are looking forward to has come, but you don't know it."

(51) 彼の弟子たちが彼に言った、「どの日に死人の安息が入り来たり、どの日に新しい世が来のでしょうか」。彼が彼らに言った、「あなたがたが待っているものは、すでに来た。しかし、あなたがたはそれを知らない」

---

この項は、前項の続きです。前項では、悟ると、言葉にはなりません感覚として「ああ、私は宇宙だ」「私は、全てだ」「ああ、宇宙の果てまで私だ」というような感覚になると言いました。

「私」と「私以外」の境目が消えてしまって、「私」がとてつもなく広がってしまった状態の体験です。

「無我」とか、「無私」とか、言われるものです。とにかく、そのように、今までの普

通の感覚とまったく違う感覚になります。無我とか無私は言葉を変えれば、それは「自分」が居ない事ですから、「自分」は「死んでいる」のと、ある意味同じです。自分が居ませんから、他と争うことも何もありませんし、恐れることも何もありません。全くの平穏になります。つまり、死人の安息というのは、死んだほどの静かな安息という意味です。

弟子達がイエスに、「そのようなものすごい平穏、安寧になるにはどうすればいいのでしょうか。どうやったらそのような時が来るのでしょうか。いつそうなるのでしょうか」と聞きました。

するとイエスは、「あなたがたが待っているものは、すでに来た。しかし、あなたがたはそれを知らない」と答えています。

どこか遠くにそのような世界があるのではなく、それはもう身近に来ている。もう、すでに自分の中にそれを要素として持っている。つまり、もうすでにやって来ている。でも、残念ながら諸君はそれを知らないだけだと言っています。やって来たわけではなく、そもそも元々自分は持っているということです。

それはそうです。「本来の自分」を覆っているものを取り去れば、それはそこにあるわけです。「本来の自分」を覆っているものとは、たくさんの記憶や学習から作成されたプログラム群です。プログラムというのは一種の行動指針です。もっと根源的には、自我に対する概念や、肉体に対する概念も含まれます。それらの蓋いを全部取り去れば、「自分」も「自分の命」という概念も無くなるわけですから、そこはいわば、「生の無い世界」、「死の世界」でもあります。でも、「本来の自分」はそこに存在している。消えてなくなるわけではありません。ですから、完全なる平穏がそこにはあります。完全なる安寧や至福がそこにはあります。マインドから見れば、死の世界のように思えますが、「死は無いこと」が分かる世界でもあります。死をも超えた世界です。「新しい世界」とイエスの弟子達は言っています。その世界です。

「それはいつ来るのですか」と、弟子が聞いたので、イエスは「もう来ているけれども、諸君が気がつかないだけだ」と言っているわけです。

イエスにとってみれば、「本来の自分」こそが、命のあるもので、マインドや肉体は、単なる乗り物でしかありません。イエスにとってみれば、マインドや肉体を自分自身だと思っている人は、まるで死んだ人のようなものです。獅子に喰われた人間は不幸であるという言い方と同じで、獅子を自分だと思っているは、その世界に入れません。

いくら知識があっても、いくら悟り方を知っていても、それを語っているのが獅子であればそれは無意味です。そうではなくて「本来の自分」に向けて進むべきです。「本来の自分」が、言葉ではない言葉で語っていることに耳を傾けるべきです。それは微かに聞こえているはずですよ。ですから、それを覆っている蓋いをどんどん取り去って、つまり、そこに進むのを邪魔している障害をどんどん取り去って、「本来の自分」に進んでいくことが大切です。

---

(52) His disciples said to him, "Twenty-four prophets spoke in Israel, and all of them spoke in you."

He said to them, "You have omitted the one living in your presence and have spoken (only) of the dead."

(52) His disciples said to him, "Twenty-four prophets have spoken in Israel, and they all spoke of you."

He said to them, "You have disregarded the living one who is in your presence, and have spoken of the dead."

(52) 彼の弟子たちが彼に言った、「24人の預言者たちがイスラエルで語りました。そして、彼らはみなあなたにあって語りました」。彼が彼らに言った、「あなたがたはあなたがたの面前で生きている者を捨て去り、死人たちを語った」

---

イエスと、イエスの弟子達は、イエスが教えを説き始めた最初の頃は、他の預言者や指導者と面談したり、議論を闘わせたりしていたのだらうと思います。また他の預言者や指導者も、イエスがどんなことを語っているのかを知りたくて、接触の機会も多々あっただらうと思われます。24人の預言者とありますが、12や24はその頃の12進法の区切りですから、ただ、単に「たくさん」という意味です。24人に意味があるわけではありません。という事は、余談ですが、イエスの弟子は12人と言われてはいますが、それも深い意味があるわけではないのではないかと思います。さて、そのように割と多くの人と、瞑想や修行についての議論を戦わせていたのだと思います。それで弟子達も他の預言者や指導者に、質問などもしたことでしょう。そしてイエスに対して、あの預言者はこんなことを言っていますが本当ですかとか、この指導者はこのように指導していますが良い方法でしょうかなどと質問したのだと思います。

それに対してイエスは、「あなたがたは、あなたがたの面前で生きている者を捨て去り、

死人たちを語った」と答えています。その意味は「せっかくあなたがたの面前に、悟った私がいるのに、どうして悟っていない人にいろいろと話を聞くのだい」という意味です。「悟った人が面前にいるのに、死んだような人とあれこれ話して、いったいなんになる?」と言ったのかもしれない。

---

「笑雲先生」

「なんだい、小松茸」

「イエスは悟っているから、自分が悟っていると、自分で分かるでしょうけど、弟子は悟っていないのですから、面前のイエスが悟っているかどうか、分からないのじゃないですか。ですから、あちこちの先生に、いろいろな質問をしたんじゃないですか」

「まあ、そうだね。だから、ちょっとイエスが、イライラしているわけだ」

「えっ、どうして、イエスがイライラしていると分かるんですか。笑雲先生」

「『死んだような人と話して、なんになる』と、イエスが言ってるからね。まあ、本心だと思う」

「ああ、じゃあ、笑雲先生も、小松茸を見ているとイライラするでしょうね」

「そうだね。修行しないから、イライラする。でもそのイライラは、同じ行動エネルギーだ。教えるためにそのエネルギーを使うように変更すれば良いわけだ」

「どう変更するのですか」

「ここではまず、弟子達が、24人の預言者から聞いた迷信や、風習や思い込みから、まずは、脱却させなければならない。その指導に向かう」

「なるほど」

「古い預言者が大切に守っているのは、古い掟やルールだ。迷信や言い伝えだ。まずそれらから自由になることだ。本来の意味や意図をしっかりと理解して、もしそれが、合理的、実際に正しければそうするし、そうでなければ捨てることだ」

「そう言えば、次の項に、笑雲先生、古い掟を捨てる話が出てきます」

「そうかい。では、さっそく次に行ってみよう」

---

(53) His disciples said to him, "Is circumcision beneficial or not?"

He said to them, "If it were beneficial, their father would beget them already circumcised from their mother."

(53) His disciples said to him, "Is circumcision useful or not?"

He said to them, "If it were useful, their father would produce children already circumcised from their mother."

(53) 彼の弟子たちが彼に言った、「割礼は役に立つでしょうか。役に立たないでしょうか」。彼らが彼に言った、「それが役に立つなら、彼ら（子供たち）の父が彼らを彼らの母（の胎）から割礼をして生んだであろうに」

ユダヤの割礼の風習等については、私はよく知りませんが、ユダヤ教の習慣、決まりのようです。イエスの弟子達は、他の預言者や指導者達の話を、イエスがことごとく否定するので、「それでは、ユダヤ人のアイデンティティーでもある、例えば、割礼もやめた方がいいのでしょうか」と、聞いたのでしょうか。

それについてイエスは、「それが役に立つなら、赤ちゃんは割礼されてから、母親から生まれるでしょうに」と、ウィットを交えて回答しています。自然に生まれ、自然に育つのが一番良いのだと、現在では当たり前のことを、イエスはその時言っているわけです。

この割礼の話だけでなく、イエスは古い風習や迷信や宗教的な儀式について、とても批判的であったと思われます。特に、ユダヤ教を守っているサドカイ派や、律法学者について、批判をしています。

つまりイエスほど悟ってしまえば、迷信や風習は、宗教団体を守っている僧侶や神官などを有利にするための人民へのまやかしだということを見抜いてしまいますから、それに対しては必ず批判的にならざるを得ないと思います。ただ私が思うに、イエスは争いを好んでいたわけではないと思うので、他の宗教団体に対するあからさまな批判や、なにか行動に移すという事は、基本的には慎んでいたと思います。

ただし弟子に対しては、弟子達からの質問もありますから、迷信等についての考え方は示していたと思います。

ついでに迷信について説明すると、マインドは自分と自分の主人を守るのが仕事ですから、危険な情報があるとそれを覚えて自分のものとしします。例えば、「これは天狗草という毒キノコで、食べると死んでしまう」と教えられれば、それが本当に毒があるのかどうかを確かめる事はなく、生涯、天狗草を食べる事は、やめてしまいます。これは合理的に自分の生命を守ろうとしていることで悪いことではありません。それと同じように、「神様に捧げ物をしないと将来地獄に落ちる」と言われると、それを確か

めることもなく、生涯その呪縛から逃れる事は普通ありません。

マインドは実は、概念の世界にしか生きていませんから、実在の本当の事も、想像上のまやかしも、マインドにとっては同じように危険な事なわけです。ですから、科学的に考えるとそれは迷信であると分かっているにもかかわらず、なかなか、迷信だと断言できないわけです。そのマインドの弱さについて、悪徳商人や、悪徳宗教家や、悪徳預言者が出てくるわけです。イエスはそれらに対して、自分の弟子達を守るために、それらは迷信であるということを何度も話していたと思われまます。

でもなかなか弟子達が納得しないので、「それが役に立つなら、赤ちゃんは割礼されてから、母親から生まれるでしょうに」と笑いながら言ったのかもしれない。

さてこのあたりで、他の預言者や指導者達へ向いていた弟子達の意識が、やっとイエスの方に向いてきたので、イエスはまた、修行のポイントについて弟子達に話し始めます。

---

(54) Jesus said, "Blessed are the poor, for yours is the kingdom of heaven."

(54) Jesus said, "Congratulations to the poor, for to you belongs Heaven's kingdom."

(54) イエスが言った、「あなたがた貧しい人たちは、幸いである。天国はあなたがたのものだから」

---

これはよく似た言い回しが、共観福音書にも出てきます。一番似ている並行箇所としては、下記があります。これはイエスの根本の教えの一つですからどこにも出てくるわけです。

【ルカ 6:20-21】

イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた。「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる。」

共観福音書に出てくる言い回しは、どれも同じパターンです。言っていることは、今不幸な気分があれば、それと真逆の方向の幸福になれるよということです。とても変な言い回しに聞こえますが、これは短絡しているので変に聞こえるわけです。もっ

と丁寧に、説明を長くして言えば次のようになります。

「今は不幸だという気分が気付いたのであれば、それはとてもラッキーなことだ。なぜなら、不幸な気分が気付いたので、それを解消する手立てさえ分かれば、その不幸な気分を解消できる。そしてそれを解消できれば、その不幸な気分の逆方向の気分、つまり、幸福な気分になれる」というわけです。

このように言える前提は、どのような不幸な気分も、それは単にマインドが作り出しているのであり、そのマインドの動き方を逆方向にすれば、即座にハッピーな気分になれる、しかも、それが容易に出来るというわけです。

イエスに言わせれば、その逆方向に向けるやり方は、とても簡単であり、それさえ習得できれば良いわけですから、結局「不幸な気分が気付いたら、すぐに幸福になれるよ」ということになります。

「貧しいなあ。嫌だなあ。と気付いたら、ラッキーですよ。思い方を変えれば、すぐに、ああ、そうだ。私はどんなに満たされ、どんなに恩恵にあずかっていて、どんなに豊かなことだろうか。なんと、幸せなことか。素晴らしい。嬉しいなあという気分になることができますよ」ということです。

それを、短絡して言うと「貧しいものは幸いなり、天国は汝のものなり」となるわけです。

さて、これを「愛と欲の8要素表」で言えば、マインドは普通、get, hold, compare, more, という欲の方向に回転していますが、これを愛の方向 give, drop, accept, enough, に回転させれば気分はすぐに幸福になるというわけです。

貧しい貧しいと思っている人が、お金持ちになって、そしてお金持ちになると幸福になれると普通の人は考えますが、イエスが言っているのはそうではありません。貧しい貧しいと不幸な気持ちでいる自分に気付いたらそれは、マインドが、そのように他との比較をして、自分の基準で判断して、貧しいという不快感を出しているのですから、その不幸に思う考え方の仕組みさえ変えれば、貧しい、不幸だという気分は消えます。すると途端に、ハッピーになりますよというわけです。

何かが不満だなどと悪い気分になっていることに気が付けば、そう考えているマインドの向きを反対向きに変えるということです。すると、その悪い気分から、直ちに抜けることができる。しかも悪い気分から抜けると人間はもともと、大幸福が根底にありますから、すぐに良い気分になるということです。

イエスの言っているポイントをもう一度、一言で言えば「悪い気分が気付いたらラッ

キーだ」ということです。

普通、悪い気分になって、それをどうしようどうしようとその悪い気分の原因になった外部の諸事情を変更や修正しようとそちらばかり考えますが、そうではなくて、内側に向かうということです。

イエスは多分このことを、何度も何度も言葉を変えて、場所を変えて弟子達に教えていたのだと思います。それでどの福音書にもこの言葉は残っています。

こうなれば幸せになれる、というのを人間は幼児の頃から、自分の経験や親の教育などによって学習して覚えていきます。それらが判断基準となっているわけです。その判断基準を自分に押し当てて判断していますから、これはまだ満足できないから不満だとか、これはまだ貧しいとか、これは心配だとか、色々なそのような思考になるわけです。欲が満たされていないから、不幸な気分になっているわけですから、欲を満たせば幸福な気分になるだろうというのが普通の発想です。

イエスの言っているのは、そうではありません。欲から愛の方向に、マインドの向きそのものを変える工夫です。判断基準を変えるとと言ってもいいです。「コップに水が半分しかない」という思い方を、「コップに水が半分もあって、ありがたい」という思い方に変えるわけです。

でも、多くの親は自分の子供の成長を願って、「コップに水が半分もあると思ってはいけな、半分しかないのだから、頑張ってもう少し水を獲得しなければならないよ」と教えます。

すなわち、「もっと認められなければならない」「もっと上位に上がらなくてはならない」「もっと勉強しなくてはならない」「もっとお金を稼がなければいけない」「もっと我慢強くならなければならない」「もっと真剣にならなくてはならない」等々と、親も教えますし、先生も教えますし、自分も納得してそのように学習していきます。

でも、イエスのこの「切り返しの技」を使うには、それらの思い込みや行動指針を変える必要があるわけですから、それがもし堅固に持たれていると、なかなかこの技が使えません。なぜ、堅固に持たれているのかといえば、それは幼い時に、親から叱られたとか、叱咤激励されたとか、折檻を受けたとか、そのようないわゆる「教育」が深く染みついているからです。そのような否定型の教育だけでなく、何かが出来たら誉められたとか、泣くのを我慢したらご褒美に飴を貰えたとか、肯定型の教育もあり



ますが、それも同じことです。つまり自分を守って育ててくれた、強い親がしっかりと、それらのプログラムを守っているのだから、その心象の親の手を振り払わなければ、それらを抜くことがなかなか難しいわけです。

ですから、このイエスの技を使うには、親から受けたそのような「教育的」呪縛から、逃れる必要が、まずあるというわけです。

---

「笑雲先生」

「なんだい、小松茸」

「親の教育的呪縛から、逃れられなければ、判断基準はなかなか変わりませんね」

「そうだね。親は子供によかれと思って、そのような教育を普通にする。そして、それはある程度は良いことだ。でも、子供は、それによって、自分を縛ってしまう。呪縛してしまう。特に幼い時に覚えたことは、大人になると、まるで、サイズが小さくなった鎧兜のようなものだ」

「なるほど。小さい時はそれで自分を守れたけれど、今となっては、窮屈で逆に、自分を苦しめているようなものですね」

「そうだ。だから、その不要になった鎧兜を脱ぐ必要がある。でも、それは、親が子供に対して、外は危険がいっぱいだ。外は危険な敵ばかりだ。だから、ちゃんと着ておきなさいと命じたものだ。だから、なかなか脱ぐ勇気がでない」

「じゃあ、どうすればいいんですか。笑雲先生」

「そう、聞いた弟子がいたのだろうな。イエスの次の言葉は、その説明になっている」

「そうですか、では、次に行きましょう」

---

(55) Jesus said, "Whoever does not hate his father and his mother cannot become a disciple to me. And whoever does not hate his brothers and sisters and take up his cross in my way will not be worthy of me."

(55) Jesus said, "Whoever does not hate father and mother cannot be my disciple, and whoever does not hate brothers and sisters, and carry the cross as I do, will not be worthy of me."

(55) イエスが言った、「その父とその母を憎まない者は、私の弟子であることができないであろう。私のように、その兄弟とその姉妹を憎まない者、その十字架を負わない者は、私にふさわしくないであろう」

イエスは磔になって死ぬことになりましたから、キリスト教は十字架をシンボルにしています。十字架を背負うという事は大変なことだ、苦しいことだという事は誰でもよくわかりますが、イエスが生前に十字架をその譬（たと）えとして使って話をしていたとは考えられません。ですからこのような言葉が残っているとすると、この部分はイエスが語った言葉ではないという気がします。

その部分を除いてもう一度読んでみても、これはなかなか難しい文章です。普通常識的には、親兄弟と仲良くしなさいと言います。しかしイエスは、親兄弟を憎めと言っています。そうでなければ私の弟子ではないと言っています。

イエスのように悟った人が、そして、隣人を愛せよと常々言っている人が、親兄弟を憎むことができなければ弟子にはなれないよというのは、とても矛盾した話のように思えます。

ここで言う「私の弟子」という意味は、修行を進めて悟りに向かうということを教えていたわけですから、その修行がちゃんとできる人のことでしょう。

つまり、これは修行者に対して言っている言葉で、先程の幼児期から積み重ねてきた様々なプログラムを見直して抜去するためには、それを守っている「心象の親」を倒さなければ抜去ができないということです。

インディアンの子供は、小さい時に親から地面に輪を描かれて、その輪の中で遊ぶように躰られます。なぜなら、親が少し目を離した隙に、子供がどこかに行ってしまうとは、獰猛なコヨーテや野獣にやられてしまうからです。最初は子供もその輪を超えて出て遊びに行くこともあったでしょうが、何度も厳しく躰られると、もう出てはいけなのだと、しっかりプログラム化されてしまいます。つまり、親が輪を描いて、この輪から出るなど言えば子供はもう出られないわけです。その子供が成長し、筋骨隆々の壮年になって、その親がまだ健在で、よぼよぼのおじいさんであっても、そのおじいさんが輪を描いて息子に出るなど言えば、大の大人がやはり輪から出られないのだそうです。

このように親の影響が分かりやすいものもありますが、「認められなくてはいけない」とか「お金持ちでなければ馬鹿にされる」とか様々な、自分はそういう考えを持っていることが間違いだとはちっとも思っていないようなことまで、実は親の躰や教育が、深く影響しています。